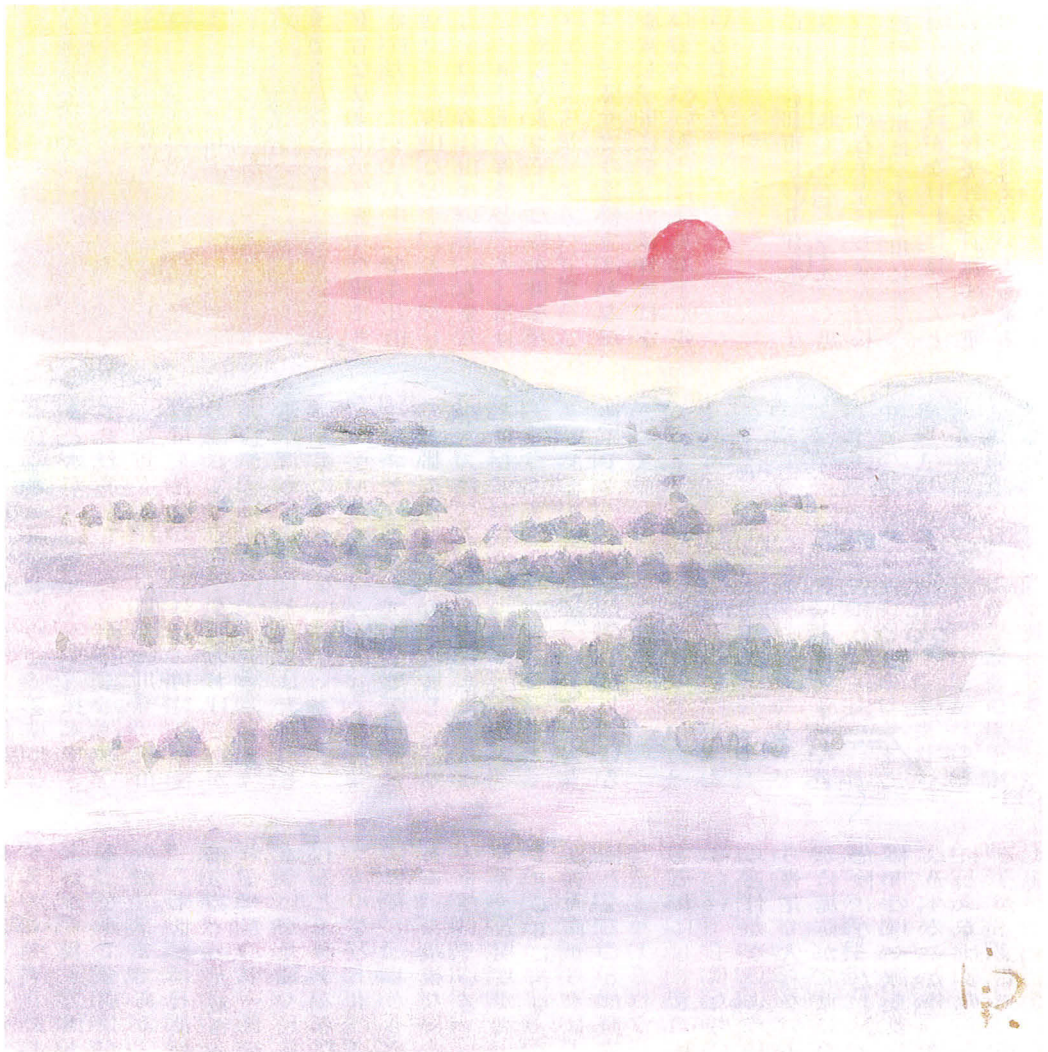


文化高知

'96年1月 NO.69



「あけぼの」 山本卓子

(財) 高知市文化振興事業団

水に親しむ

立川 涼

大相撲九州場所は土佐ノ海が両横綱を破る大活躍、久しぶりに土佐から横綱への期待が高まっている。

力士の醜名(しこな)について、河川工学の権威高橋裕東大名誉教授は興味深い指摘をされている。

「川の名を醜名とする力士が、戦前には多かったが、高度成長期以後、山・海など他の自然を現わす名とともに減っているのは、全国的に川への親しみが減り、角力ファンの共感を得られにくくなったためであろうか」(岩波新書『都市と水』一九八八年)

早速、今場所の幕内力士四十二人を調べてみた。海は土佐ノ海も含め三人、山も武双山など三人に対して、川のついた力士は一人もいない。

昔はどうだったのだろうか、秘書の田中さんに図書館で探してもらった新聞によれば、昭和十六年春場所、

あの有名な双葉山が優勝した時である。幕内力士五十一人中、なんと山は双葉山、羽黒山など十二人。たしかに力士の醜名に山はいかにも坐りがよい。海は玉ノ海など三人。川は当時、横綱を張っていた男女川など七人いる。

たった一場所での比較ではあるが、山も激減し、川に至っては皆無になっただけで済んでいる。海はしぶとく残っているようだ。

松山から高知市に移り住んで、土佐は水に恵まれているとつくづく思う。八十八カ所石手寺にちなんだ松山市内の石手川は、天井川に近く、ダムからの放流がなければほとんど水量はない。道後平野を貫流する重信川は水流が全く見えない所もある。もともと河床礫の下を深く水が流れており、そこに魚も住みついてい

というおかしな川である。私が愛媛大学に赴任して間もなく、重信川の水質の定点調査を始めた。夏場になると水が全くなくなつて、採水できずあわてたものだ。

高知では江ノ口川も鏡川も、松山の川を見られた者には、何時も漫漫と流れていると、少しおかげさだが実感させられている。大きな内湾、浦戸湾も高知市にとっては素晴らしい財産にちがいない。

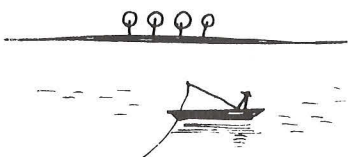
ソウルの漢江、パリのセーヌ川、バンコクのチャオプラヤ川など世界の大都市は川とともに発展してきた。ベニスやベネチア湾を抜きに語ることはむずかしい。

いきなり生臭い話になるが、今、世界で水のコストが急上昇している。

言いかえると水商売は最も成長性のあるビジネスと考えられている。ミネラル・ウォーター、下水処理、水道から親水公園まで広い分野がある。なかでも成長が期待されているのがアジアである。

二十世紀は石油の世紀とも言われ、油をめぐって戦争が絶えなかった。来るべき二十一世紀は油に代わって水争いが地域や民族間で繰り広げられると予測する専門家もいる。イスラエルなど上水のほとんどは地下水に依存し、しかもその汚染は深刻である。大規模な海水淡水化施設の導入を急いでいると伝えられている。世界一透明度が高いバイカル湖の水もPCBに汚染されている。水量、水質両面から水はますます貴重な資源となることは間違いない。

それにしても、私どもは今、川に冷たい。子供たちに、川は危険だから近付かないように、怪我をするから裸足で入らないように言う。たしかに堤防が立派になるとともに川は危険になったところもなくはない。都市の川や海を親しみやすいものに改造することは、水に恵まれた高知にとっては夢のある課題ではないだろうか。文化や芸術、余暇や生活はビジネスとしても将来性は大きい。(高知大学学長)



廣田早紀先生を偲びつつ

横山 充男

わたしはまんが世代である。この頃、読書なるものをした記憶がちつともない。それが童話作家になるというのだから人生は奥深い。いや、謎めいてさえいる。

今も基本的には公共の図書館にまんがは置いていない。まんがはつねに「公共」の場からは排斥されつつけている。ところが、高知県というところは、その漫画家が多いことでも有名である。県人の気質をあらわしているようで嬉しくなる。「かまなかまん」「ええちやええちや」「なんちゃあない」といった土佐弁にじみ出ているように、おおらかでこだわりがなく、反骨とやさしさをなまにこめた土佐気質が、すぐれた漫画家を輩出させたのだろう。ユーモアは、反骨とやさしさから生まれ、わたしもまんがは大好きだった。

貸本屋でまんがが一冊一泊五円。一日十円の小遣いだから、残りの五円で駄菓子を買った。貸本屋にかぎらず、お好み焼き屋、焼きいも屋などというところには必ずまんが本が置かれており、夢中で読んだ。

そんなまんが好きのわたしが、なぜ児童文学の作家になったのだろう。こじつけかもしれないが、やはり土佐の風土と気質がそうさせたのではないかと思っている。まんがが非芸術的なものとして、或いは反教育的なものとして、世の良識家?から侮蔑的に扱われてきたように、児童文学もまた「女・子ども」のてなぐさみといったふうには、二重の軽視にさらされてきた。土佐で育ったわたしに、児童文学へむかわせた根っこが、そのあたりにほの見える。虐げられ軽視された側からこそ、真実が見えてくるという歴史観を信じてい

るからだ。

こむずかしい話は別として、わたしの創作の根幹には、故郷の風土が色濃く根付いているのは確かだ。幡多地方の風や匂いや水や空や虫たち。中村の町で過ごした少年期は、まさに黄金時代であった。

もうひとつ根っこがある。中村小学校二年生のとき、わたしが書いた「ぼくのくせ」という作文が、なかのコンクールで表彰された。世にいう「綴り方」とか「作文教育」とかいうものである。

全国的にも、高知県は熱心な県だ。たのしみではないだろうか。著名な実践家では故廣田早紀先生がおられるが、わたしの担任であった岡村育代先生もよく作文を書かせた。その頃のわたしは、家庭が貧しく、生活環境も悪かったせいも、勉強や学校がつまらなかつた。おとなしい性格もあって、ストレスがはげしいチック症状となつてあらわれていた。吃音もそのひとつで、自己の感情をうまく表現できず、いっそうチックをふやしていった。そうした神経質なたしを、岡村先生はうまく受けとめてくださった。けつして論を急がず、自己や家族を見つめる方法として、ことを文字でじっくり紡いでいく方法を教えてくれた。読書は相変わらずちつともしなかつたが、作文は

好きになった。

高知県内在住の童話作家の他に、県外で活躍する高知県ゆかりの童話作家が近年目立ちだした。『風のラプソング』の越水利江子さん。『しあわせ畑のクローバー』『霧の協奏曲』の西村恭子さん。笹山久三さんも、このごろ児童文学作品をお書きになつている。こんど映画になつた絵本作家の田島兄弟なども、ジャンルとしては近いところにおられる。ちなみに西村恭子さんは、故廣田早紀先生がはじめて担任された作文教室一期生でもある。実は田島征彦さんも、学年はちがうが同じ小学校にいた。わたしと西村恭子さんは児童文学の同人仲間である。そんな関係で、生前廣田早紀先生ともひよんなことからおつきあいさせていただいた。他にも聞けば次から次とふしぎな縁のつながりを知らされ、あぜんとしたことがある。それはまた別の機会に書いてみたいと思つている。どちらにせよ、高知の作文教育が児童作家を育てていったのは確かであり、その教え子たちが年齢的にもようやく実を結ぶところに来たといえるだろう。廣田早紀先生を五月に亡くして以来、手前勝手ながらそういうふうになんか自負することになっている。(児童文学作家・梅花女子大学講師)

二十一世紀の高知県と留学生

田村 安興

国際化が進む大学

二十一世紀までの最後の十年間もいよいよ後半に入る。二十一世紀の日本が真の豊かさをめざそうとするなら第一に、中央一極集中から地方分権の推進、第二はアジアとの交流の活発化が必要である。そして、アジアとの交流には留学生が大きな役割を果たさなくてはならない。私が勤務する高知大学には現在百人近くの留学生が来日して勉強している。私が学生として在学していた一九七〇年ごろ、初めての留学生がただ一人台湾から来日した事を記憶しているから、この四半世紀高知大学の国際化は著しく進んだと言える。しかし、アジア諸国の大学と比較すると日本の大学の国際化は非常に遅れているのが現状である。例外もあるが一般的に言えば、まず、日本の大学は日本語でしか授業しない講義が圧倒的に多いが、アジア諸国の大学はバイリンガルが普通である。アジア各国の大学には外国人研究者、学生専用の宿舎が充実している（やと近年高知大学にも小規模な施設が農学部キャンパスにできたにすぎない）。学生教職員による研究教育上の大学間の交流がアジア諸国間では非常に活発である。また、研究教

育上の施設、条件は日本の大学より進んでいる大学が多い。日本人は日本があらゆる面でアジアのトップだと思っている人が多いが実際はそんな事はない。特に学生の勉学意欲を比較すると雲泥の相違がある。

苦勞する留学生

そのような日本の大学にもアジア諸国から来日する留学生が多くなつた事は結構な事だ。しかし彼らを受け入れる日本には多くの壁がある。たとえ学力があり、日本語能力が高くても、来日するには日本人の身元引受人が必要である。見ず知らずの留学生の身元引受人になつてもらえる日本人を探す事はたいへん難しい。高知大学の場合、多くの民間ボランティアの方々御好意に依存している。また、来日時や滞在期間の更新時には入管の厳しい審査を受けなければならぬ。日本の入管ほど厳しい審査を行う国は恐らくないであろう。さらに、際だつて高い学費と生活費が学生の勉強条件を困難にする。日本社会は外国人には客人としての親切心をもって迎える事が多いが、西洋の白人に接するほどの親切心をアジア系の人には寄せようとするしない。明治維新以来の「脱亜入欧」の残像が日本社会の底流にまだ潜んでいる

のか、アジアの多様で豊かな文化を学ぼうとする動きはまだ少ない。アジアからの留学生は日本人のそのような感情に敏感である。まだ多くの日本人の心の中に残っている保守的な感情に関わりなく、アジアとの関わりなくしては日本の、そして高知県の二十一世紀の発展はありえないであろう。そして高知県と躍進するアジアの架け橋の中心が留学生である。

躍進する華人経済圏

すでに多くの日本人がアジアへのネットワークをもって、ビジネスや研究活動を行っている。私の親しくしていただいている高知短期大学におられたM先生は若い頃マレーシアの最高学府マレー大学に留学された。そのころ先生と一緒に学生寮で学生生活をともにした学生はみんな東南アジア各国の実業界の第一線で活躍しているという。学生から強い尊敬を受けていたM先生は今でも彼らと文通し交流している。先生が東南アジアへ調査に行くときには彼らの手配によって、何の支障もなく、どこにでも調査研究に向くことが可能だという。マレー大学にはマレーシアだけでなく東南アジア諸国から多くの留学生が来ている。彼らは卒業

した後各国に帰り、大学時代のネットワークを生かしながらそれぞれの国の経済発展に寄与した。特に華人のネットワークは強いものがあり、東南アジア経済は華人経済圏であるといつても過言ではない。

高知県にもネットワークを生かしてアジア諸国へ進出する動きがある。しかし、それは華人のネットワークに遠く及ばない。華人の進出はすばやく、きめ細かであり、しかも容易に現地化する。従って文化摩擦が少ない。日本人の経済進出は常に摩擦を伴ってきた。文化や習慣、経営風土の相違を無視し、現地化する努力が欠けていたためである。「郷に入りては郷に従え」ができぬうちはいつまでもアジアの隣国から嫌われるだろう。日本人は同一世界の少しの違いを見過ごせないで均一化したがる性格がある。高知県は確かに「お客」の習慣では東京とは随分違うし、サービスの接客態度が悪い事、納期の時間を守らない事等、特異な県民性を指摘される事が多い。高知は日本の平均的なレベルからみれば異質なところがある。高知も日本の中の「アジア」なのかもしれない。

私は高知の明日を切り開き、アジアとの距離を一気に短縮させるものは留学生だと考えている。高知大学からすでに多くの留学生が母国へと

巣だっている。福建省のT君は三井物産への就職を断り中国に帰国した。

あれから五年にすぎないが、経済開放の波に乗り、ボタン製作の郷鎮企



業にはじまり、海運会社、不動産会社、乳酸菌飲料の会社を次々と設立した。経営はいずれも順調だといふ彼は学生時代、高知で私達といくつかの会社を訪問した。そのときのかれの目は輝いており、経営者に矢張り早くに質問を浴びせ、写真を撮りまくっていた。その他東南アジアに帰国した留学生は、日系企業の現地法人に就職した人や貿易商を行う人がいる。彼らはいずれも高知にいい思い出をもって帰国した。高知で養った教養とネットワークを生かし、今後の高知とアジア諸国の架け橋となつてくれるであろう。

新交通体系と高知県

高知の二十一世紀は外洋港の開港と高速道路四車線化、新国土軸建設によって物流の拠点となる事が期待される。戦前には浦戸港と中国との定期航路があった。船から陸上輸送の時代になったが、高速船の開発によって二十一世紀にはアジアと無数の航路が開設される事が期待される。その上で高知県の一部を関税ゼ口の経済特別区にしてはどうか。そうすれば文化的にも経済的にもアジアの窓口となり、大きな南の風が吹くであろう。

(高知大学人文学部教授)

西洋画を日本へ導入した「美術の志士」

國澤 新九郎

——その短き光芒——

谷 是 ただし

ヨーロッパで西洋画を学び、それを最初に日本に導入した人が「土佐の男」であったと言えば「そんな人がいたの？」とおっしゃる方がいるかも知れない。國澤新九郎好良が、その人である。今、生誕百五十年、没後百二十年を機して、生誕地に碑を造る運動が起こっている。「美術の先駆者、啓蒙者」としての功績を賛えると共に、県展五十年の年に、美術振興のモニュメントとして、高知の一角に建立されることは、真に

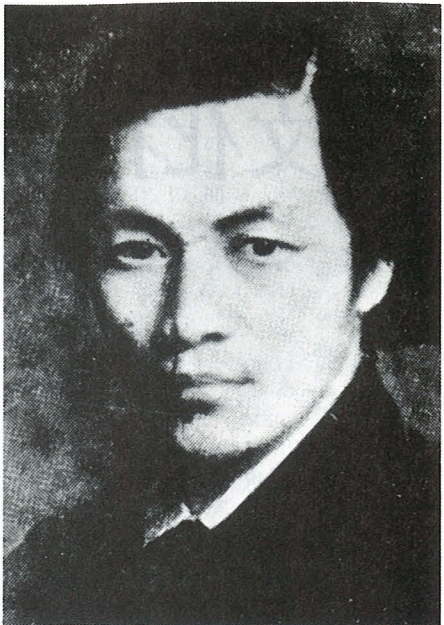
意義深いことと言わねばならない。弘化四年十二月二十二日、高知城下越前町に生まれた。父四郎右衛門好古、母辰の長男で、幼名は熊太郎、のち泉、維新後は新九郎と称した。戦国時代の武将、國澤城主國澤藏人秦能明から続く十代目である。祖父才助好察は御山奉行を務めた御馬廻の上士、和歌や水墨画に堪能な知識人、父好古も幡多奉行を務めていたが慶応三年七月十七日、幡多中村にて四十一歳で没している。好古の弟

孫四郎重忠は、長屋重用の養子となり重名と言ったが、戊辰の役では北越方面に出征、のち陸軍大佐となった。他方海田、鉄網珊瑚と号して画技に長じ、刀剣に詳しく、『肥後金工録』という著書まで出した人。また好古の妻辰は、大町元鎮の二女で、その弟元統、のちの通は、文豪大町桂月(芳衛)の父に当たる。つまり新九郎と桂月とは従兄弟同士であったが、以上のようにこの家系は、文化や芸術的教養の高い家筋であったことがわかる。

新九郎は幼少時、本町筋二丁目鳥崎塾へ通い、慶応三年、二十歳の時、第一大隊二番小隊司令、のち第二大隊十八番小隊司令に転じ、英式訓練を命ぜられた。同十二月軍艦羽衣に乗船して京都に向かい、翌正月三日大阪で鳥羽伏見の戦いに遭遇する。その後各地を転戦、砲術局陸軍指南役から海軍局頭取となり、明治二年二月海軍指揮役且大監察となっていた。そして新政に徴用された「夕顔丸」の船将として榎本武揚がたてこもる函館戦争に参加している。ところが明治三年二月「米国行法律科修業」を命ぜられ、東京にて「英知行」と変更され、七月二十一日真辺戒作を長として、松井正水、深尾貝作、馬場辰猪と共に高知藩留学生として、米国廻りで英国に留学のた

めに出発したのである。一行がロンドンに到着したのは九月の末であった。牧師ダニエルに連れられて、ロンドン西方の町チペンハムへ行き、その郊外ラングレイという小村で六カ月英語の修得に努め、その後ウォーミンスターで六カ月、つまり一年間の修学の後、ロンドンに帰り、ユニバーシティ・カレッジに通って、藩命の課目に従って修業することとなる。

明治五年七月、海外視察と条約改正の予備折衝のため、岩倉具視使節団がロンドンに到着、十一月までイギリスに滞在した。この一行は海外にいる日本人留学生の実情を調査する目的も持っていたが、土佐の佐々木高行、田中光頭が同行していた。馬場はこの機会に、海軍機関学の修業から法律学の勉強に志を変えて許可を得たと言われるが、新九郎は滞在中、西洋画の優秀なことに驚嘆、これを修得して日本に導入することが自分の使命だと発心した。馬場同様に使節団に訴えたのか、確証はないが、おそらく同様の申し出をしたのではなからうか。七月には高知藩から権大参事片岡健吉、伴正順がロンドンに着き、健吉の日記によると、國澤ら留学生は再三片岡に会って交流を重ねている。彼の志望変更も、片岡にも十分訴えられたに違いない。



國澤新九郎の自画像

魚、西周、田崎延次郎ら画家志望の青年達が、本場仕込みの國澤とあって群がるように入門した。京橋区西紺屋町に分館を造り、明治八年新たに竹川町表通りに煉瓦屋を借り

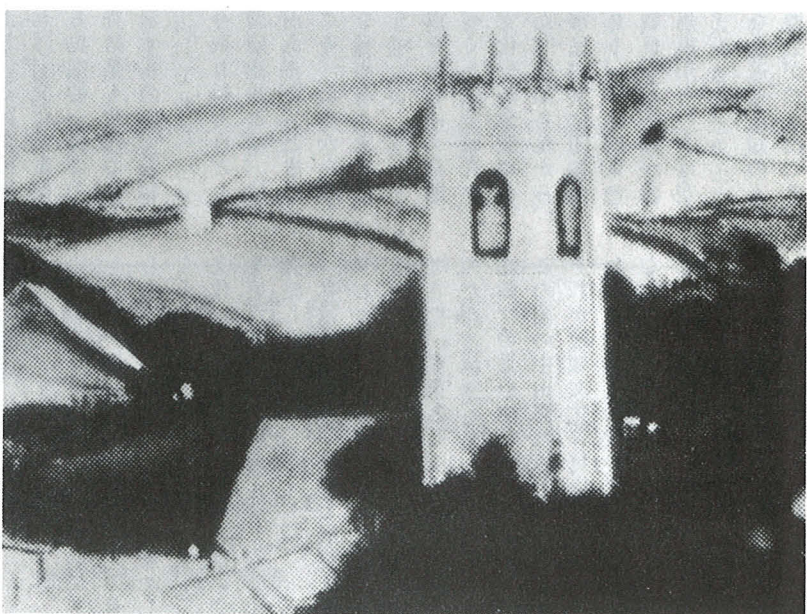
て教室を開いた。彼は竹川町でロンドンから持ち帰った画や画材、参考書を一般に展示し、これがわが国洋画展の幕開けでもあった。その他油絵縦覧所をもうけ、後に平河町に移したが、毎月二十五日の平河町天満宮祭に、生徒の習作を展示した。これは真に「グループ展の嚆矢」と言えよう。さらに明治九年には画学校設立の建白書を文部省に提出したと伝えられるが、十年一月にはすでに九十一名の門人がいたのである。当時、高橋由一の天絵社と共に二大洋画塾であった。

國澤は以来、ロンドン在住の風俗画家ジョン・エドガー・ウィリアムズに師事して西洋画を学び、アカデミックな画法を修得した。そして留学期限が来ると、有り金を注ぎ込んで多数の参考書、画材、石膏らを購入し、日本へ持ち帰ったのである。明治七年七月、新九郎は帰朝した。いったん高知の母の元へ帰宅した彼は、自宅の座敷に滞欧作を一室に掛けて、しばらく陳列したといわれている。これは真に「高知での最初の洋画展」であり、日本に灯した西洋画の灯であった。その後、母、妻、長女を連れて上京、麴町平河町に居を定め「画塾彰技堂」を開設した。そして同年晩秋の頃には生徒の募集を行い、本多錦吉郎、浅井忠、菊池

國澤は明治十年三月十二日、平河町二丁目六番地で、三十歳の若さで没した。青山の墓地に埋葬されるとき、門人達は、幣紙を結んだ梅花の枝を投じたという。國澤が生前戯れ

に語った洋葬の礼式に習ったものである。

今日、彼の残した作品は数点を残すのみで、ほとんど残っていない。帰国後も学校経営と生徒指導に多忙な毎日であったろう。しかし日本に洋画の灯を灯した「美術の志士」としての功績は光っている。流れ星にも似た短い光芒であったが、門人達は、その志を継ぎ、明治画壇に立った。中でも浅井忠は、梅原龍三郎、安井曾太郎らを育て、土佐からは楠永直枝、上村昌訓らが、本田が継承した彰技堂で学び、高知県立一中、二中で教鞭をとった。とりわけ楠永は一中在籍三十一年にもわたり、土佐の美術振興の恩人であった。國澤の縁は土佐にも脈々継承されたわけである。今般の生誕地の碑は、その意味からも意義が深い。県民のご



油絵「ロンドン郊外」 國澤新九郎作

協力を得て、立派に果たしたいと念じている。

(※御芳財をいただける方は事務局・高知市鷹匠町一―二―四七・日米学院内「國澤新九郎の生誕地に碑を建てる会」会長筒井広道・電話⑧八一一八へご連絡下さい。募集要項を送付します)

「國澤新九郎の生誕地に碑を建てる会」 常任幹事

文化行政の現場から

大崎博澄

平成七年度から、県庁では文化行政の所管が教育委員会から知事部局に新設された文化推進課に移され、全庁的に文化の視点を取り入れて仕事に取り組み方針が確認された。高知県の「文化元年」と位置付けられた年に、文化行政を担当する窓口を籍をおかせて頂いたことに感謝している。

昨年四月以来、「文化の県づくり」という新しい政策課題に取り組みシステムづくり、いくつかの大きな文化イベント、文学館など文化施設の新設や既存の施設の運営改革、政策研究など、総勢十三人が力に余る仕事に、けつまずいたりころんだりの慌ただしい日々を過ごしている。もっとも、当人達がバタバタしているほどに成果が目に見えるわけではなく、県民の皆さんには何をやっているのかおそろく分からないだろうと、年度末も近付くにつれ、申し訳ないやら、焦るやらの気持ちもつづっている。

折角「文化高知」に無理をお願いして貴重な紙面をお貸し頂いたので、私達が何を指し、何をやるうとしているのか、その一端をご報告したい。

知事選挙の前に行われた高知新聞

の県政に関する世論調査の中に、「文化の県づくり」という質問項目があった。文化行政に携わる者として、調査結果を興味深く拝見したのは当然だが、気になることが一、二あった。

ひとつは、初めて文化推進派が産業振興派を上回ったという調査結果を導いた設問。それは、文化と産業経済の関係を考える典型的な視点で作られており、調査結果も時代の流れに沿った傾向を示すもので、違和感はない。

ただ、私たちが今取り組もうとしている文化行政の問題意識とは、設問自体に少しずれがあるな、と思った。その「ずれ」こそ、これからの高知県の文化行政を進めるうえでのひとつの鍵だと思ふ。

昨年七月に中村市を中心に「全国文化のみえるまちづくり政策研究フォーラム」という文化行政全般にわたる勉強会を行った。全国各地から文化に関心を持つ市民、文化団体の活動家、アーティスト、文化政策の研究者、自治体の職員など多数が参加してくださり、規模からいえば空前の催しとなった。

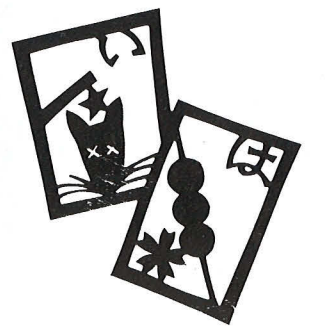
全国各地の素敵な人達と高知の人が直接知り合う機会ができたこと、取り組む。また、文化行政を進めるためには役所的な体質、役人的な発想を改め、私達自身の感性を豊かにし、日常の仕事のやり方をもっと文化的なものに変えていくことが欠かせない。このことを抜きにして文化行政は語れない。

政策を決めるまでのプロセスが見える行政、そのプロセスに県民市民が気軽に楽しく参加できる仕組みづくりも課題である。昨年は「県民ネットワーク」という肩書き抜き、楽しくやることをモットーにする市民組織を作った。さらに幅広くいろいろな方々といろいろな形で手をつないでいきたい。

やるべきことは山ほどある。どれも一朝一夕にはできない。成果はなかなか目に見えない。が、目に見える文化のハードあるいは新聞記事になる成果よりも、目に見えない文化ソフトあるいは県民参加への誠実な努力の過程が、本当は大切だと私は思っている。

県庁北庁舎三階の私達のオフィス、文化推進課をお気軽にお訪ねください。

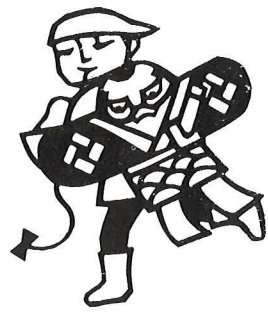
(高知県文化推進課課長)



いろいろな地域や組織、機関にチャネルが開かれたことなど、これからの高知県の文化にとって肥やしになるだろう成果はたくさんあるが、文化に関する人々の考え方はいやはや実に多種多様であることも改めて実感した。

私は文化行政の課題と展望をテーマとする分科会に参加したのだが、研究者達の議論を聞くうちに苛立った。産業として成り立たなくなってきた農業林業を基盤とし、過疎化、高齢化の進む中で存亡の危機にあるこの国の中山間地域をどうするのか、それが地域文化に足場を置くべきことからの文化行政の緊急の課題ではないのか、中山間地域が荒廃すれば都市も減る、文化振興の議論どころではない。そんな怒りの質問をしてみました。

それに対してひとつの答えが示さ



れた。中山間地域の一次産業の活性化は、経済軸の考え方ではもうできない、文化軸の発想がなければ展望はひらけない、というものである。応用は難しいがひとつのヒントはあると思う。

世論調査の設問に感じた「ずれ」というのは、このことと照応する。文化と経済、文化と産業を別の物、対立的にとらえる時代は終わったのではないか。経済という下部構造に文化という上部構造が乗っているという古典的な考え方も少し違うと思う。

文化が一定の経済的な基盤の上で成り立つと同様に、経済を生き活きとしたものにするためには文化の視

点が欠かせない、文化的な感性ぬきに産業の創造的な発展はあり得ない、文化と産業経済は、別の物でも対立するものでもないのである。とても難しい問題であるし、しろうとで考えて抽象的な議論の域を出ないが、中山間地域の、自然の循環の理に合った高度に完成された農業、それが環境や国土の保全に果たす役割、そういった文化的価値をヒューマンな視点で見直すところから、生き残りへの道のりが見える発想が見付かると思ふ。

気になったことのひとつは、「文化の県づくり」の内容がよくわからないという答えが二十パーセントあったことである。

立上りの年であるし、悪い数字ではないという見方もできるだろうが、やはり責任を感じる。機会あるごとに私達の考え方を県民の皆さんに伝え、広くご意見もお聞きしたい。文化はひとりよがりになりがちだから。

先の問題とも関連するが、私達は文化を芸術文化だけでなく、まちづくりや地域おこし、産業経済の領域まで含めて幅広くとらえて関わるつもりである。町並みの保存や埋もれた地域資源の開発といった事業にも

賛助会員募集中!!

年額 2,000円

- ① 機関紙「文化高知」を年6回お手元にお届けします。
- ② 事業団発行の出版物の10%割引 (一部例外あり)
- ③ 主催事業や刊行物の案内 (マスコミ利用の場合あり)

[※上記特典は申し込みいただいた日から1カ年有効]

※お申し込み ①郵便振替 ②現金書留 ③直接事業団へ…

いずれの方法でもけっこうです。

費 典
会 特

地球の最果ての地ネパールと地球の屋根と言われるヒマラヤの大自然。一生に一度はこの目でとの願望は、山に招かれ、人に招かれ実現した。ただただ感動の極みである。

まず異様に思えたのは「牛・大名の権威と横暴さ」であった。わが物顔に街をのし歩き、牛様を車は避けて通る光景。「所変われば品変わる」とのたとえがあるが、カヌマンドガや目玉寺、旧王宮と巡るほどに、信教上の戒律が、生活習慣や風俗を支配している姿には、想像を絶するものがあつた。

街のバザール等、行き交う人々の表情は屈託なく、悠然そのもの。額の朱印と、まとった極彩色のガウンと、古めかしい寺院の建造物とのコントラストは、オリエンタルな感じとしておであつた。

多かつた感動の旅

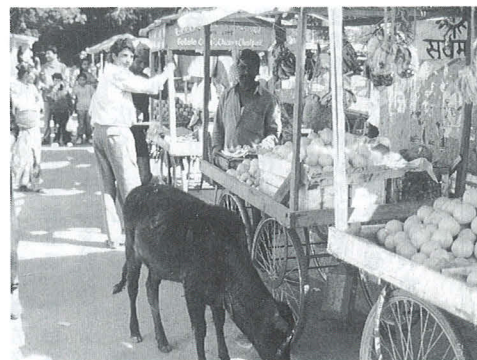
高野直則

■ネパール・ヒマラヤ紀行

教えられることの

たほっこしながら、歌の交流で時をすごしへりの人となる。寸時ながらも、エベレストの偉容に接した満足感で、再びカトマンズに降り、ポカラよりアンナプルナ山系の高知県登山隊初登頂のラムジュンヒマールを眼下に、ジヨムソンに飛ぶ。

ポカラ空港出発二時間前の朝、同行のT氏が体の不調を訴える。安全第一をモットーの我々は、四千メートル程のムスタンやカクベニ探訪は諦め、コース変更を検討の傍ら、医師を迎えての診断の段取りを進める。三十分の予定が、待てど暮らせど往診がない。イライラと右往左往の神だのみ。ガイドにハードな注文の始末。一時間後、やっと往診の姿に接した時の安堵感は格別であつた。聴診・触診・血圧と応急の診断は、「無理しなければ大丈夫」との結論



「牛様」

カトマンズを後にエベレストに飛ぼうと、朝もやの空港に急ぐと、二時間余りの遅れとのこと。のんびりムードで、一人とて慌てる光景はない。恥ずかしながら、日本人のせつから氣質が早くもあらわれる。空港

近くの有名なバシユパチナ一ト寺院に向け、大祭翌日の姿を追う。ヒンズー教の聖地とかで、火葬の骨灰を、ガンジス川の源流に葬り、故人を弔うのである。死者の灰を裸体にまとい、経典を捧げ声明と共に供養の極致に達する情景は、異様と言うより、戦慄を覚えたことだった。宗教とは……の思いを秘めて、寺院を後に

で、空港に急行。再度機内の人となる。名峰マチャブチャレ等ヒマール山群をぬい、猫の額のジヨムソン空港に到着。

山小屋に落ち着き、直ちに近藤亨先生の実験農場へ。荒涼とした山肌や河原、魚の一匹もすまないというカリガンダキ川を七キロ程遡上。牛や馬、ラバの隊商のカウベルの響きは、今も脳裏にハローモニーする程の印象の中に、農場の土を踏む。

カトマンズの近藤事務所訪問の節は大歓迎を受け「ヤラセ番組事件の証人で東京に行かねばならず、農場の案内はできないが、現地人とも話



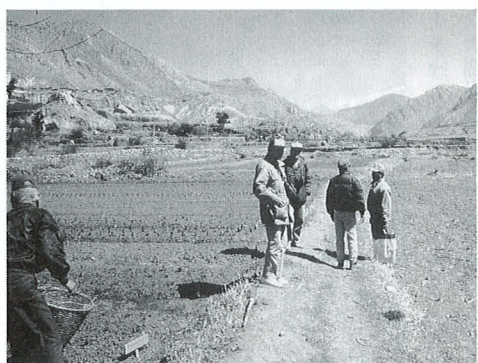
近藤亨先生の事務所の前で

ルクラ行き機内の人となる。機窓に展開するヒマラヤ山系の雄大な景観。別世界の大パノラマに感嘆すること三十数分、ルクラより一気にはりでタンボジュに飛ぶ。名もなき六〜七千メートル級の山塊や名峰を右に左に展望しつつ、ポーターに民謡を習いながら、ヒマラヤ・ビューホテルに向かう。まさに「絶景かな」の表現しかない偉容の山々。雲の流れの合間に、必死のスナップ・ショット。寒さと、ガスと酸欠におびえつつ感動の乾杯を喜び、夕食後にくつろいだ時、二人の仲間が高山病に見舞われる。酸素ボンベのマスクと、カイロの暖で処理。夜明けごろに酸欠の大事。エベレストベ



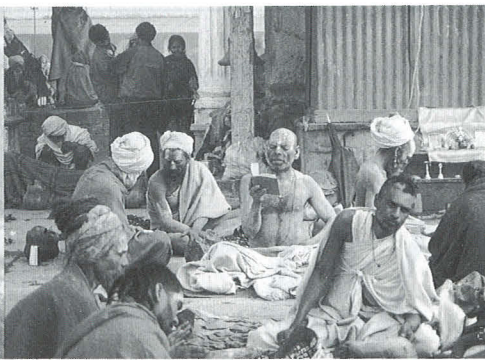
カヌマンドガにて

して見聞して欲しい」、奥地行の節は馬も提供して下さるとのありがたいお言葉。非常なご好意とご温情に感極まったことだったが、さすが……。ムスタンの秘境に、チューリップの花を咲かせ、リングゴを実らせるとの信念で、学校も建て、現地人と共に「至誠天に通ず」と、開発の夢に生きる先生に、夢と希望を託して生きる現地の人々の姿や、農場の現実に接し、七十四歳にして命を懸ける先生の情熱と行動には、ただただ敬服するばかり、実感と、感動の農場見聞であつた。



近藤農園にて

ジヨムソンでの一夜は明け、近藤先生のご厚意の馬やポーターやガイドのお世話になり、雪と風の中を十数キロ、ラマ教とヒンズー教の聖地



「バシユパチナート」の祈り



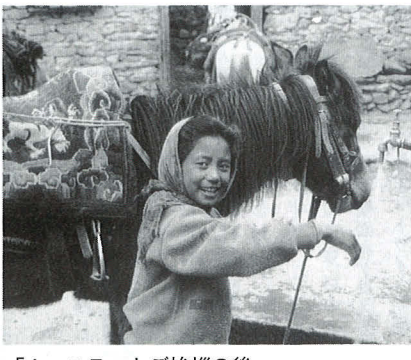
遠くにエベレストを望む

スキャンピング地ゴーチエトレック行きを急ぎよ変更、下山する。高度差四五百メートル下ると、嘘のように復調。ラバの毛を紡ぐ原住民と日な



笑顔いっぱいの子どもたち

カクベニを探訪する。「ナマステ」（今日は）と微笑の合掌で迎えてくれる子供。牛馬と全家族の労働で土を鋤き、糸を紡ぎ、生き生きと、さも楽しげに、あるがままの幸せいっぱいに生きている人々の姿や生活につぶさに接し「人間の幸福とは何だろう、文化とは何なのか……」と考



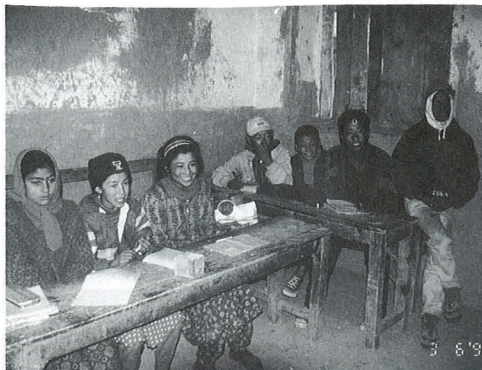
「ナマステ」とご挨拶の後、馬を水場につれて行く少女

えたことだった。

家族の一員として、悠然と燃料用の馬糞を拾い、水を汲み、喜々として働く子供達の心からの笑顔。「塾だ、試験だ」と競争社会の中であえぐ日本の子供たちの現実の姿を連想し、気は重くなる。「文化汚染」の言葉さえ想起したくなったことであつた。

聖地ゆえか、各所に建つソトーバの景観と、雪と風の厳しい自然の中をジョムソンに帰る。翌日は風雪のためか飛ばないヘリ。これ幸いと、現地の小中高併設の学校を訪れ、交流親睦の授業に発展しラッキー。

岩だらけの校庭の石垣を越したポールを、大切そうに胸に抱いて校庭に入る高校生。一個しかないバレー



ジョムソン小学校での交流（5年生教室）

ボール。オルガンの一台もなく、泥壁を黒く塗った黒板に「さくら

さくら」をローマ字で書き、通訳を通してお土産の歌をプレゼント。目を輝かせて歌い、笑みをたたえて懸命に聴唱して頂き本当に嬉しかった。お返しにと、民俗楽器の伴奏で「リッサンビリ」の民謡を習う。音楽はエスペラント、心は通じ合い、ゲームも交えた一時

間の交流の感動は忘れられない。電灯はあつても灯らなく、閉じ込められた宿のキャンドルの下で、各国の仲間や、現地の人と過ごした二夜の後、チャーター機で、や

つとポカラの人となる。再々度のカトマンズでは、香北町出身の蘭園芸家、明石良和氏のオ



明石氏の蘭園を訪ねて



結婚の祝宴

ーチャードランドを訪ねる。功成つた大蘭園を見学。感無量。

途中、現地の結婚式に招待される幸運に恵まれ、三日三晩続くらしい祝宴で、地酒や手づくり料理を頂きネパールの方々の温情にも接し、印象的な交流ができたのはうれしかった。

厳しい自然と極貧の中で、とことん明るく、家族や地域の人々と共に大らかに「生」をエンジョイし、人間同士、家族同士、地域同士が、自然や動物と共生し、あるがままに人生を楽しんでいる姿に学び、教えられたネパール探訪であった。

（赤岡町社会教育指導員）

元旦の計

山岡 千枝子

友人から頂いた本を読んでいると、オートキャンプ場の「とまろつと」がシーズンの夏場だけではなく、お正月をそこで過ごすという予約で満杯である、という記述が目に入った。

「とまろつと」のログハウスの窓から、眼下に広がる太平洋の初日の出を眺めるのは最高の贅沢」と書いている。

「とまろつと」は私の故郷四万十川河口の町、下田に出来た土佐西南大規模公園の中にある。

数年前、帰省の折に、その場所の展望台から眺めたパノラマのように三方から迫ってくる壮大な太平洋が眼に浮かんだ。そして、さらに昔、私が小学生の頃、毎年元旦の早朝、「初日の出を拝んでこい」と祖母にたたき起こされて、裏山から拝んだ

初日の出の感動がさざ波のように甦ってきた。

私の眼の中で、荘厳な日の出の光景がこの世のものとも思われぬほど美しく膨らんできて、矢もたてもたまらず本に載っている「とまろつと」の電話番号を回していた。予約で満杯と書かれてあつたが、小学校からの同級生がそこで支配人をしてもらいたい、という噂を耳にしていたからである。

予想通り「満室ぜよ」という彼に、「どうしてもそこでお正月を」とキャンセル待ちを申し込むと、二日後にすぐに電話がかかってきて、希望通りに予約することが出来た。私が「とまろつと」で新年を迎えたいと執着した理由は他にもある。

一年前、私は「ねの首岬」という小説を書いて椋庵文学賞を受賞した。

その「ねの首岬」というのが「とまろつと」のある場所の地名であつたからだ。

新年早々、この受賞作と、四万十川河口を題材とする数編で「ねの首岬」という作品集を出版することになった。

いま現代の若者たちがサーフィンを楽しむこの場所で、五十年前、太平洋戦争の末期に当時の若者たちが、自爆を手段とする突撃演習をしていた……。そのことを思い起こし、戦争の哀れさ、虚しさを、ねの首のとまろつとで見詰め直してみよう。そして壮大な太平洋に浮かび上がってくる初日の出を見ながら『ねの首岬』の出版に祝杯をあげよう……。大きな声では言いたくないのだが、還暦のお祝いを兼ねて)

私はすっかり有頂天になってこの計画を市内に住む同郷の友人に吹聴した。

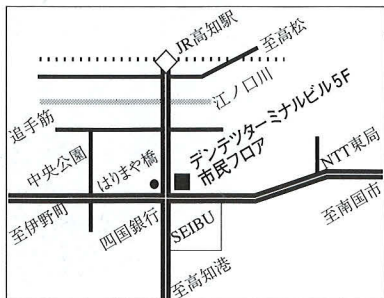
「ねえ、ねえ、聞いて。お正月にとまろつとに宿をとって初日の出を拝むことにしたのよ。すごいと思わん？」

「あなた、知っちゃうが？ あのログハウスというのは室内にトイレがないのよ。夏ならいざ知らず、夜中にトイレに起きたりするわれわれの年代には無理、無理。冬場はやめちゃき！」

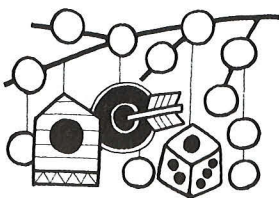
市民フロアのご利用を

展示や会議に最適！

広さ・内装 96㎡壁面布クロス張り、スポットライト完備
所在地 高知市はりまや町
一―五―一・デンテツ
ターミナルビル5階



申し込み (財)高知市文化振興事業団
☎ 73-4365



同行することになっていく夫が、夜中に二度も三度もトイレに起きる。その上、以前に夏かぜから肺炎を併発した経歴がある。

万事休す。ログハウスと還暦は相性が悪かったらしい。私はキャンセル待ちでようやく手にした正月の予約をキャンセルするはめになってしまった。

一九九六年第一日目の計がもろくも崩れたわけだが、「ねの首岬」の出版は計画通りである。私の眼の中の、少女の頃感動したあの初日の出はまだ消えてはいない。

（平成六年度椋庵文学賞受賞・主婦）

紫式部の造った男たち [V]

宇治の男君 薫

藤田 加代



源氏物語第三部は、「光隠れたまひし後」の物語です。「光」は言うまでもなく光源氏のことですから、この文句は、彼の死後を意味します。同時にこの「光」は、世を照らす光明をも暗示するもので、そこから「光隠れたまひし後」の物語は、救いのない無明の世界であったことにもなるのです。

ところで「匂宮」巻冒頭文は、光源氏死後の無明の世界には、「かの御影に立ち継ぎたまふべき人」が「あり難」かったと叙します。源氏物語第三部の世界は、理想の主人公を失って、その後継者を見出しにくい状況から始まるわけです。

しかし源氏の死後の物語に、再び「光」は存在しなくとも、それでも際立つ二人の若者の登場があります。二人には、当初から源氏に「立ち継ぎたまふべき」絶対性はなく、どこかひ弱で、世紀末的な空虚さがありました。しかも、源氏の一面を各々受け継いで対極にある存在でもありました。一人は薫。源氏が晩年に得た女三宮腹の若君というのですが、実父は柏木でした。今一人は匂宮。今上の第三皇子で母は明石中宮、従って彼は源氏の孫ということになります。薫は、源氏の罪障を背

負い、その憂愁を継承していますし、匂宮は、源氏の明るい華やきを継承していますが、二人の退嬰性や享楽性には、既に末世に入った時代の頹廢が漂うのを否定できません。二人は一歳違いの兄弟のように六条院で育ちました。

源氏物語第三部の主人公には、薫を考えるのが普通でしょう。平安朝の物語において、主人公であるための資格は、親たちの物語を持つこと、また独詠歌の多いことだと言われます。薫が悲劇的な出生の物語を持ち、源氏に次いで多い十八首の独詠歌を詠むことから見れば、彼が主人公であることに疑義を挟む余地はなさそうに思われます。しかし、絶対的超越的な主人公であった源氏に対して、薫は、匂宮との関係によつてのみ主人公であり得る、矮小化された相対的な主人公に過ぎないのです。

柏木と女三宮との密通によつて生を受けた薫は、出生に対する疑惑から憂愁に沈む少年に生い立ちます。そして、やがて、世俗的名誉や華麗な婚姻を厭う、内向的な青年になります。彼は、冷泉院と秋好中宮の庇護を受け、今上に厚遇され、宮廷社会の支持と信望を集めた貴公子ですが、その現世否定的な姿勢に反し

て、源氏以上の栄達を得、しかも「まばゆきまで華やかなる御身の飾り」に埋れつつ、宮廷社会との一体感を奇妙に欠落した人物なのです。秘密を持ち、コンプレックスを内在させて、貴族社会に安住できない名門の御曹司、といった珍しい人物設定なのです。

おぼつかない誰に問はましいかにしてはじめもはても知らぬわが身ぞ
この歌には、アイデンティティを求め得ぬ存在の心許なさが、切実に表れています。

薫は褒めものの若者でした。しかし、彼の立場は、秘密保持によつて危うく保たれたものでした。従って薫の道心も、「さまよく」「はづかし」「心にくき」振る舞いや「心長き」心遣いも、彼の美点や理想性を語るかに似て、わが出生の秘密露見を防ぎ、わが身をガードする方便であったようにも思われます。その道心は特に、屈折した過敏さのため、安住できない宮廷社会からの離脱を願うものだったのではないのでしょうか。

薫にとつての宇治は、それ故、わ

が劣等意識を払拭し、自己解放して生きられる別天地だったのかも知れません。そこは、かつて王権争奪に利用され、「京」から放逐されて

仏道修行に志す八宮が隠遁する世界でした。宮廷社会の寵児でありながら、魂においてそこから弾き出された薫にとつて、俗聖八宮は、構えることなく心を交わし合える同類であり、その姫君たちは薫を癒す存在でした。

大君は、こうした薫の深く思慕する人でした。しかし彼女は、薫の求婚を拒否したまま死にます。大君が独身の生涯を選んだ理由は彼女自身にもありました。が、その大部分は、薫の側にあったように思われます。薫にとつて大君は、道心の延長線上に求め得た恋人で、魂を預け癒しを期待する相手でした。清らかに見えて、それは、わが願いが露骨に先行する利己的な恋でもあったのです。霊肉の共有を願ひ、愛の中に自己を解放させるストリートな熱さはなく、女の本能的な拒否に遭うと、もう一歩が踏み出せない薫でした。「人の心破らじ」という薫の想念は、デリケートな優しさの形をとりにながら、女を立ちすくませ、疎害するものでした。



一夜薫が大君の寝室に入り、「御髪のかほれかりたるを掻きやりつつ見る」状況までつくりながら、女

の拒否に遭って諦め、後に引く事件がありました。薫のこの姿勢を、大君は「恥づかしげに見えにくき」と

観じ、立ちすくみ、すべてを断念したのではなかったでしょうか。つまり、逃れ難い状況で、受け止められ損ねた「愛」は、行方知れずになり、後には亡骸のような大君の結婚拒否の論理が残ったのではないのでしょうか。女性を享楽の具に使う頹廢と空虚に比べて女性を癒しや救済の具とのみ見る観念性は、対極にあるように見えて、彼女が生身の人間存在として受け止められていない点では同質なのです。「恥づかしげに見えにくき」とは、女を萎縮させ、地上の愛の交歓を阻害する、薫の本質であった、と言つてもよいでしょう。

「恥づかしげに見えにくき」薫のありようは、彼の恋をすべて不如意に終わらせ、やがて、浮舟の悲劇を生みます。それは、大君を受け止め損ねた薫の、浮舟ともすれ違った当然の帰結でした。浮舟は薫にとつて「追慕」の具に過ぎず、そこに源氏物語最後の暗いドラマが生じます。それは次回、匂宮との関連において、考えたいと思います。
(高知女子大学保育短期大学教授)

高知市文化振興事業団編 高知のエスプリ A5判 一六〇頁 定価 二、〇〇〇円	山本 大著 幕末の青春 坂本龍馬の青春 四六判 一六八頁 定価 一、〇〇〇円	依光 裕編著 珍聞土佐物語 上下巻 四六判 三九二頁 定価 一、六〇〇円	鈴木文彦・井本正人 関根猪一郎 著 (高知レポート6) 協同組合と地域づくり A5判 一三六頁 定価 一、〇〇〇円	清達幸男 著 (高知レポート5) 高知県の工業 A5判 一二二頁 定価 一、〇〇〇円	外崎光広 著 土佐自由民権運動史 A5判 四四四頁 定価 二、八〇〇円	岡林清水 著 高知県文学散歩 四六判 二七八頁 定価 一、八〇〇円	高知の文化を考える会編 高知の文化を考える A5判 一八八頁 定価 一、二〇〇円	高知市文化振興事業団編 わがまち百景 A5変 一三四頁 定価 一、二〇〇円	筒井広道 著 画帳の歳月 A5変 一五六頁 定価 二、〇〇〇円	土居重俊・浜田数義 編 高知県方言辞典 A5判 七三六頁 定価 六、一八〇円	高水啓夫 著 土佐の芸能 B5変 三四六頁 定価 四、九四四円
---	---	---	---	---	--	--	---	--	--	---	--

(2)

稲作文化の広がり

小林英治



わが国から韓国、台湾、中国南部、東南アジアの国々、そしてインドやスリランカまで米を主食とする民族が広がる。西洋の小麦やジャガイモを食べる文化圏に対して、アジアには稲作の文化がある。古来アジアの農民たちは黙々と稲づくりに励んで来て、これに伴う文化を育て伝統を受け継いできた。

タイの反体制詩人として名高いチット・プーミサック（一九三〇年生まれ）に『めしを食うとき』という次のような詩がある。

指でめし粒をつまむ度に
きっと思い出しておくれ
あなたが食べるのは、ほくの汗
だからあなたは大きくなった
このめし粒には味がある
どんな階層の人も受け入れる味が
思えば辛いことだった

苦しい労働、忘れやしない

緑の稲穂が稔るまで
その道のりの長いこと
穂が黄金に輝くまで
どんなに苦勞が続いたことか
どんなに汗を流したことか
どの一粒も汗のしずく
どれほど筋が浮き出たことか
その穂がめしに変わるまで

あのうす赤い汗のしずく
とめどなく流れ落ちる
勤勞のしずく
ほくの赤い血潮がみな
染み込むはずだ
あなたの齒に

稲の栽培が始まった地はどこだろう。多くの学者がこれまで研究を重ねてきたが、京都大学の渡部忠世教授の『稲の道』（NHK出版、一九七七年刊）によって、ヒマラヤ東南

麓のアッサムから中国南部の雲南地方にかけての山地とする説が有力になってきた。遺跡から出た籾を調べた結果、稲づくりの起源は紀元前三千五百年から五千年の昔にさかのぼると推定されている。

稲作はそこから中国南部の低地や東南アジアに伝播した。わが国には縄文時代の末期頃に種籾を携えた私たちの祖先が渡って来て、伝わったものと推定されている。

インドネシアやフィリピンなど東南アジアの稲作地帯を歩くと、ヤシの木と水牛が点在する光景を除くとわが国の水田風景と全く同じであり、郷愁を誘われる。ただ二期作が可能なのもあって、ひとつの田で稲刈りを行っているかと思うと隣の田では田植えをしているという具合に、家によってまちまちな風景によく出くわす。

耕して天に至る棚田（千枚田）も中国をはじめ、ネパール、ベトナム、タイ、インドネシアなどに広く見られ、農民たちがきれいに手入れをしているのを見るのは気持ちがいい。フィリピンのイフガオ族によるバナウエのライス・テラス（棚田）は紀元前からの歴史を誇り、石や土を積んで造られた田に立つと時代の重みを感じる。観光地とし

て知られるインドネシアのバリ島にも美しい棚田が見られ、田の神を丁寧にもつる。

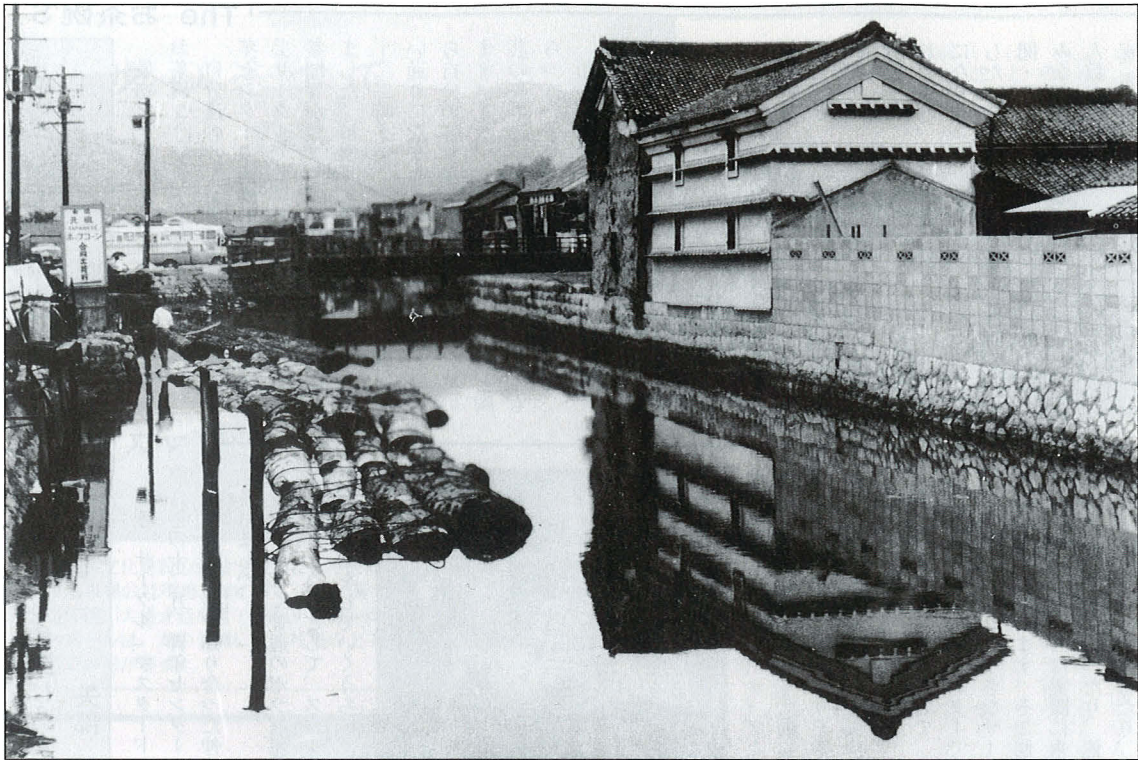
昨年九月に梶原町で「棚田サミット」が開催され、全国八十市町村の関係者が集まって、棚田の持つ役割と環境保全の大切さを話し合った。わが国の棚田は全国の水田面積の一割をしめるほどだが、農家の高齢化などにより荒廃が目立ってきた。

ウルグアイ・ラウンドの締結に続いて、新食糧法が施行された。このところわが国稲作農家の志気があがらないのが気になる。元気の良いアジアの農民たちと交流してアジア版の「棚田サミット」を開いてはどうだろう。

（高知大学人文学部教授）



フィリピンの穂刈り鎌（左）とインドネシア・バタック地方の農事曆（右）



第11回写真コンテスト・高知を撮る入賞作品

高知を撮る

新堀川の風景

江川 一義

「人生はジグソー・パズルのようなもの。最初は不必要と思われたり、何故こんなものがあるのか理解に苦しむピースがありました。人生の図柄がほぼ見通せる年齢になると、どのピースもすべて人生にとって不可欠であり、深みを添えていることが分かりました。

本年もよろしくお願
いたします。」
二年前の元旦に、村
田稔雄氏から頂いた年
賀状である。

氏は当時横浜商科大
学商学部長であったが、
昨夏、衆望を担って学
長に就任された。

かつて市商で十年余
教鞭をとられたことも
あり、高知市とは縁が
深い。市内の特別養護
老人ホームで病氣療養
中の兄上を見舞うた
めに、いまも時折帰高される。

「老人ホームで痛感するのは、最近の若い職員の献身的介護で、全く頭が下がります。私のいとこ（母の妹の娘）である「田内千鶴子」が韓国の孤児を育てた

あるジグソー・パズル



風俗歳時記

苦勞をテーマにして、『愛の黙示録』という映画が製作され、高知の方々から大変お世話になっていきます。（昨年八月八日付書簡）

折々の新聞報道で、この映画の完成に至る経緯を読んだり、テレビで高知ロケの風景を見たりしていたが、千鶴子さんと村田さんの関係についてはこれが初耳であった。

村田さんはいくつかの難病に侵されているうえに、最近「結腸がん」から「生還」されたばかりで、「生きていくのが不思議」とさえ思われる痛々しい状態にある。旧約聖書の「三ツ記」さながらのさまざまな試練に遭いながらも、その信仰は不動であり、このたびも自らの病状をも顧みず学長の重責を引き受けられた。

このいとこ同士お二人のジグソー・パズルは凄絶な苦難と、それを超える愛のピースに満ちている。

（朴）

自己流を楽しむ

藤平 卓士

「The お茶碗'S」

最初に、自分達のサークル「The お茶碗'S」を紹介しよう。
自分達のサークルは、桧橋の高知市青年センターで活動している素人集団の胸芸サークルです。センターの陶芸教室の参加者が集まり、平成六年十月に結成しました。毎週月・金曜日の二回、十九時～二十時まで、センターで悪戦苦闘(思い通りになかなか作れない!)をしながら自分の好きなように作品を製作しています。また、三、四か月毎に二回ほど陶芸の先生にいろいろな技術等を教えてもらっています。

始めた頃は何も知らなかった自分達でしたが、昨年の十月で一周年をむかえ、まだまだ未熟ですがそれなりに作品を作れるようになりまし。新聞・口こみなどで人数も結成当時



「マスタード」

街づくりを視野に入れて

矢部 園美

私達、サークル「マスタード」は、平成六年の十二月、青年センターのボランティア養成講座で知り合った仲間間で、結成されました。

最初は、ごく普通のボランティア活動を行うサークルとして、スタートしましたが、活動をしていくうちに、色々な問



題にぶつかり、ボランティアという言葉に縛られず、もっと広く活動して行きたいということ、街づくりを考えるサークル「マスタード」と変え気持ちも新たに、再出発しました。

今は、メンバー七・八名で、毎週金曜日、七時から、青年センターで集まり、話し合いをしたり、小さなサークル新聞を作ったりしています。その他に、休みの日などに、車イスに実際に乗って、地域や街などに出て行ったり、他のボランティアサークルと交流したり、自分達だ

「TOSAこい²」

新たな発見めざし

植村 美穂

「平成七年度高知市勤労青年国内研修」のちよつと堅苦しい名の下に、今年十月七日から五泊六日間、寝食を共にし、北海道北見市、神奈川県相模原市を訪問、青年達との交流を行ってきた、十人の研修生で結成したサークルです。

TOSAこい²というサークル名は、土佐においての来い、と個性的なメンバーを指しての濃い、が由来とされています。研修の参加に関しては、広く一般公募されてはいたものの、いざフタを開けてみると、幸か不幸か顔見知りばかり…。そしてメンバーの大半がそうであるように、適齢期にも関わらず高知市青年センターを拠点に、貴重な毎日青年活動にささげている者たちの、悲しくもあり、だけでも味のある個性豊かな集団、と化してしまいました。

目下のところ、報告書の作成、そして



「ハンバーグ」

こどもの大好きなもの

島村 民世

私達は、高知市内の保育園に勤める保育者です。サークルの名前はハンバーグといひます。

まず名前の由来ですが、子どもに関することを考えていました。子どもの好きなものを考えているうちにハンバーグをおもいつきました。いろんな物が混ざりおいしくできる、これは最高の名前だと思つて沢山の人の話しました。ちよつと恥ずかしかったのは事実です。



次にサークルが作られた経過です。私達は、子どもが大好きで保育という仕事を選びました。毎日子どもと接するなかでもっと、子どもにかかわることを勉強していきたい、子ども達ののびのびと明るく育つていける、そんな保育がしたいとおもうようになりました。そして同じ

(六人)より増え、大所帯(男二名、女十名ぐらゐ)になりました。

日頃の成果?の作品の発表は、年三回ほどセンターで行われる催しに出展しています。次回の展示予定は一月十五日(月)成人式のためにセンター一階にて行います。未熟ではありますが、時間がありましたら観に来て下さい。

最後に、いろいろな流派がありますが、これからでもできるかぎり「自己流」を楽しんでいきたいと思ひます。

連絡先 南国市大浦甲二〇六〇一四
電話 〇八八八―六三一―一二五

けではなく、多くの人達に学んでもらうと、学習会を開いたりしています。

これからの私達の課題は、少しでも多くの人に、例えば、車イスが街へ出ていくことが普通であると、感じてもらえるよう、そのきっかけ作りを行きたいと思ひます。

興味のある方は、いちどサークルをのぞいてみませんか。とても楽しい人達ばかりですよ。

連絡先 高知市桧橋通二一―一五〇
青年センター
電話 〇八八八―三二―四九三二

来年二月の北見市内研修生の受け入れ、この二つが活動の中心となっていますが、今後は他都市の青年達との交流を中心に活動していく予定となっています。

新たな発見を目指し旅立った私達。この国内研修での貴重な経験はそれぞれの宝物になりました。一人でも多くの青年達に国内研修を通じて、同じように宝探しをしてもらいたい、私達はそんな思いを抱いて新たな旅を始めています。

連絡先 高知市桧橋二一―一五〇
青年センター
電話 〇八八八―三二―四九三二

思いのなかが集まりサークルを結成することにになりました。

現在十人のメンバーで手遊びの講習会をしたり、自分達の保育実践を交流したり、クリスマスリース作りをしました。今後は、発達段階の勉強やサークルの仲間での交流を深めていくようなことをしていこうと思ひています。

保育にかかわる仕事をされているかたぜひ一緒にやりませんか。新しい仲間は大歓迎ですので気軽にお入りください。連絡先 高知市神田二三九〇一三四
電話 〇八八八―三二―〇八四三

散歩の途中で



市民総合文化施設の建設予定地としてにわかに脚光を浴びてきた九反田の現高知市駐車場公用地。そのすぐ下手に架かる大鋸屋(おがや)橋から700m程下流の鏡川大橋北詰までの堀川には、両岸に浮き桧橋が完成していた。黒いポールは、潮の干満による桧橋の上下動に対応するもの。小型船の係留は有料で許可が要る。

風俗

鼻の水

記憶を突然に呼び戻すキーがある。私の場合その一つが鼻に入った水である。洗面や入浴時その水が頭にツンと響く時少年期の川遊びが、素足での石の熱さや夕立のざわめき等と共に鮮明に浮かんでくる。高度経済成長期以前の山村には、まだまだ多くの子ども達とガキ大将が居た。

夏休み、小さな川(と言っても魚などは豊富だった)には、終日子ども達の歓声が途絶えることなく自然と一体となっていた。盛夏の真昼、大人達は木陰で遠くに子ども達の声を聞きながら暫しの休みを取っていた。貧しくはあったが、ゆったりとした時間が流れていたように思ふ。

不思議にもその記憶にアブラやミンミンの蟬の声が入っていない。真昼時は子ども達の声全てであり、それが遠く近くと、その強弱を時折吹く風が演出していた。子ども達は、澄んだ淵の深みに白い石を投げそれを誰が先に取ってくるか競つたものだ。裸眼で潜り、一番に石を手にしてガキ大将に勝ちを告げられた時の喜びは、また、少年の誇りでもあった。赤とんぼが飛び、ヒグラシが鳴くまで川遊びは続き、帰宅時は気だるさの中でも充実感に満ちていた。

鼻の水は、それを生々しく、しかも瞬時に呼び戻させるキーである。

私の子ども達の記憶の回線先は、プールだといひ。それは、塩素の臭いや監視の人の笛の音に繋がるのか私には定かではないが、これからは、プール派が増え続けるの(かむ)



ミュージカル

「絵金」

出演者募集

musical
[e-kin]

「ミュージカル・RYOMA」
「ミュージカル・津野山物語」に続く
市民参加ミュージカル第3弾「ミュージカル・絵金」!!
現代に蘇った幕末の芝居絵師「金蔵」が
空間と時間を超えて
土佐の大地を自由に闊歩する斬新な劇手法。
ロック・フュージョン・ラップ・ポップス・ニュークラシック、
多彩な音楽と先鋭のダンス。
この“現代ミュージカル”に
あなたの若い力をぶつけてみませんか。
経験は不要、ふるってご応募ください!

- 作・演出/帆足寿夫
- 振付/國友須賀
- 歌唱指導/土居敏秀
- 音楽/渡辺浩・長谷川靖・西本知代・近森真哉

【募集要項】

- 対象
15歳以上の高知県在住の男女
(中学生は除く)
経験不問
- スクール募集人員
100人
- スクール参加費
4,000円
- 締切
1996年1月10日(水)
当日必着
- 申込方法

履歴書に写真1点(郵送か持参)

- 申込先
〒780 高知市本町5-2-3
高知市文化振興事業団
phone: 0888-73-4365
- スクール日程
1996年
1月18日(木)・25日(木)
2月1日(木)・3日(土)・4日(日)
オーディション2月8日(木)
- 公演日
1996年11月3日(日)・4日(月)

【主催】

(財)高知市文化振興事業団

【後援】

高知市・高知市教育委員会・高知市文化
推進協議会・RKC高知放送・KUTVテレ
ビ高知・NHK高知放送局・高知ケーブル
テレビ・エフエム高知・高知新聞社・朝
日新聞社高知支局・毎日新聞社高知支局・
読売新聞社高知支局